

## はじめに

皆さんこんにちは。只今ご紹介にあずかりました笹本です。

本日の講演会の主催者である私たちのNPO法人は、「川の自然と文化研究所」という名称です。研究の主体となる川とは、「地表の水が集まって流れる水路。河川。河流」（新村出編『広辞苑』第5版、岩波書店、1984年）のことですから、基本的に自然現象によって形成されたものです。法人の名称でもわかるように、研究所は自然が先に来ていて、集まっている人もどちらかというと理科系の人が多く、文化系の「文化」に目を向ける人が少ないようです。本日お集まりの皆様にも、同じような傾向があるように思います。

文化系の人間が川に着目するときの視点には、通路としての川、経済的な流通網を担う川、あるいは水資源としての川、観光資源としての川など、多様なものがあります。ところで、私の専門分野は歴史学で、武田信玄を中心とする戦国時代を専攻しています。そこで、本日は文化系ということで歴史学の立場から、日本人が川や水にどのような意識を抱いていたかについて、お話ししてみたいと思います。過去の人々にとって、川とはどのようなイメージの場所だったのでしょうか。長い人間の歴史の一端には、水や川との戦いがありました。この戦いを通して、人々が水を治める時、過去の日本人はどのような気持ちを抱いていたのでしょうか。精神的な世界で、日本人が川に対してどのようにつきあってきたか、川の文化的側面をお話ししてみたいのです。

こうした問題を通し、改めて日本人が川に対して抱いてきた心性を確認し、今後役に立てることができればいいなあと考えています。